

張文環文学の原郷 出水坑から考える

著者	野間 信幸
著者別名	Nobuyuki Noma
雑誌名	東洋大学中国哲学文学科紀要
号	21
ページ	133-168
発行年	2013-03
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00004181/



張文環文学の原郷

―出水坑から考える―

野 間 信 幸

一・張文環文学の原郷

張文環（一九〇九年十月―一九七八年二月）の書く小説の舞台として最もよく登場するのは、梅山である。代表作として数えられる『山茶花』（一九四〇年）『閹鷄』（一九四二年）『地に這うもの』（一九七五年）などの作品は、いずれも梅山が舞台となっている。また単に作品の背景として使われているだけではなく、梅山の発展の歴史が描きこまれており、ちよつとした梅山沿革史にもなっている。

梅山は嘉義県の北東部にあつて、雲林県との県境に近く、縦貫鉄道の嘉義駅からほぼ二十キロメートルのところにある。最寄駅は大林駅であるが、直線距離でも十一キロ以上はあるので、便数の少ないバスか、駅前に数台しかないタクシー（計程車）を利用しなくてはならない。ちなみに張文環が暮らしていたころは、歩くか乗合自動車（バス）を利用するほか、「五分車」と呼ばれた（製糖会社が走らせていた）軽便鉄道を利用して、梅山（の外れにあつた駅）から大林駅に出て縦貫鉄道に乗り換えていた（写真1）。最近は高速道路（福爾摩沙高速公路）が開通して梅山の西

外れにインターチェンジができて便利になったが、それまでは嘉義から車で行くのに竹崎経由で梅山に向かうしか道がなかった。

さて梅山（梅山郷梅山）というは現在の地名で、それまでは小梅と呼ばれていた（一九五〇年に改称）。小梅という地名も途中から改称されたもので、もともとの地名は梅仔坑といった。梅仔坑から梅山に変わったのが一九二〇（大正九）年であるので、張文環が住みはじめたころにほぼ重なる。

張文環が作品に梅山の沿革を描きこむのは、この町の歴史に通じていることのほかに、梅山に対して特別な思いを持っていたからであろう。ふつうこのような感情は、「故郷」に対して抱くものである。ところが張文環の生まれ故郷は、梅山を麓町に持つ標高千メートルの太平山の中にある山村、太平である。梅山（梅仔坑）には十二歳で公学校（入学当時は梅仔坑公学校）に入学するのを機に、移り住んだのであった。本稿に付す「公学校の思ひで」にも、その頃の様子が記されている。

張文環が多感な頃を過ごした梅山に特別な思いを抱くのは当然だとしても、生まれ育ったのは、梅山の東の方角にそびえる（写真2）山の中であつた。そのため張文環の作品に描かれた山村の風景を見ようとすると、そびえたつ山中に入っていくかなくてはならないのである。

そこで筆者はこれまでたびたび生まれ故郷の太平（かつては大坪と呼ばれていた）を訪れたり（写真3）、「地方生活」（『台湾文学』二巻四号 一九四二年十月）に描かれたR部落を龍眼と見立てて、太平から龍眼に行つてみたりもした（写真4）。これら山奥の村落への訪問は、いずれも麓町の梅山から上つてゆくルートをとった。

兩村への訪問によつて、これまで小さな町にしか思えなかつた梅山が、山奥から見るとけっこうにぎやかで大きな町に見えてしまうことに気付かされた。山奥の村に生まれ育つた張文環少年には、麓の町（梅仔坑）が文化的で輝い

ているように思えたことであろう。

この落差をよく知る張文環の小説には、作品舞台と登場人物の意識にしばしば二重構造の仕掛けが施されていることを、かつて筆者は「張文環と二つの太平山―閉ざされた作品舞台―」で考察した（上記注3）。

ところで張文環にゆかりのある山奥の村落は、大坪（太平）と龍眼の二村だけではない。もうひとつ、出水坑という山村がある。出水坑は、大坪から龍眼とは逆方向（南の方角）にあり、阿里山系の山中にある寒村である（地図1参照）。現在の行政区画では嘉義縣竹崎郷に属しており（太平と龍眼は嘉義縣梅山郷）、最寄りの麓町は竹崎ということになる。

この出水坑との関係を、張文環の従弟である張銳漢は、柳書琴氏のインタビューに答えて以下のように語っている。

従兄は幼年時代に大坪（現在の太平）に住んでいたが、よく両親に連れられて出水仔の山に行き、その山小屋や麓の家屋を行き来していた。山には竹林が広がっており、猿がたくさん生息していることを、村の者なら誰もが知っていた。文環は学校に上がるまで、出水仔の山で遊んで暮っていたといえるだろう。⁽⁴⁾

出水仔とは出水坑のことであろう。ともあれ張銳漢の語りは、古い地図によっても証明される（地図2参照）。この地は一九〇四年にはすでに「出水坑（ソツイケン）」として、現在と同じ地名で存在していたことがわかる。込みあった等高線の間には、竹林の記号（現在の国土地理院の地図記号では笹地）が書き込まれており、これも張氏の記憶と符合する。

張文環が幼少期に見ていた風景が、今も昔日のまま残っていることはないにしても、雰囲気などは保たれているかもしれない。出水坑へはぜひ出かけておく必要がある。

二. 出水坑へ

出水坑は山中にある村落である。麓の竹崎から上つてゆくと、途中から曲がりくねった急坂が続く。等高線の入った地図で、ほぼ標高千メートルあたりにあることが見て取れる。

はじめて出水坑を目指したのは、二〇〇九年九月であった。ところがそのちょうど一ヶ月前（八月七日～九日）に台風八号が台湾南部を襲い、水害が発生して約七百人の死者・行方不明者を出す大きな被害をもたらした。馬英九政権の対応の遅れが批判され、内閣が総辞職するほどの事態にまで発展した。

被災は高雄県、屏東県、嘉義県に及び、阿里山鉄道は全線でストップしたままで、復旧の目途もたっていなかった。出水坑の状況は具体的に把握しようにも情報がないので、ともかく現地に行ってみることにした。ところが途中から落下した岩が道路に転がっていたり（写真5）、がけ崩れの道がそのまま放置されていて（写真6）、危険な行程になった。なんとか出水坑の看板まではたどり着くことができたが（写真7）、ここから先は復旧工事中で引き返すしかなかった。

この時は、出水坑から太平までの距離感を得ることを目的としていたので、これで諦めてしまうわけにはいかず、太平の側に回って、太平から行き止まりの工事現場の反対側に向かうことにした。

そこでいったん竹崎に下りて梅山へ行き、つづら折りの急坂を上って太平にたどり着いた。梅山から太平までは、

がけ崩れがなかった。こうして太平から出水坑を目指したが、五分ほど下ったところにある太興社区の入り口で、早くも行き止まりとなっていました。太興でも家がぐずれ、電柱や木がなぎ倒されていた（写真8）。結局この年の調査は出水坑と太平の間を通ることができず、ここで終わってしまいました。

翌年二〇一〇年九月、再調査を試みた。ところが二〇〇七年の龍眼調査以来、懇意にしていたタクシーの運転手が、出水坑はまだ復旧していないので危険だと言い張って、入山を拒否した。太平側からなら行ってもよいというので、やむなく梅山経由のコースで上っていった。一年も経っているので復旧を期待したが、去年よりも一分間だけ先に行けただけで通行止めになってしまった。（写真9）

さらに一年経った二〇一一年八月下旬、運転手を替え、竹崎から出水坑へ向かった。出水坑はその年もまだ復旧工事中であったが、工事の人に声をかけると通してもらうことができた。しかし下車して、写真を撮ったりできる状態ではなかった。（写真10）

それでも通過できたことによって、出水坑と太平の距離感をつかむことができた。ちなみに竹崎から出水坑までは（車で）約二十分、出水坑から太平までは十五分ほどを要した。ともあれ三年がかりで、はじめて出水坑を通過することができたのであった。運転手に訊ねてみると、出水坑から太平まで二時間程度で歩くことができるだろうと言う。翌年の二〇一二年九月にも、出水坑へ赴いた。今次の目的は、出水坑で車を下りて村の様子を写真に収めることにおいた。道路の補修工事はまだ一部続いていたが、大きな問題もなく出水坑に到着することができた。「出水坑」と記された標識や、へこんだミラーも元のままであったが、ミラーに新たに「南無阿弥陀仏」と貼つてあるのは、村に人的被害が出たということであろうか。（写真11）

出水坑は、静かなたたずまいの山村である。村人と出会うことも、めったにない。地名からも連想されるとおり、

写真を通して道が湿っているのうかがえる。村の集落は、ざっと数十軒ほどの規模のように見えた。(写真12) 村は山に囲まれており、張銳漢の回想にあった竹林は、今も変わらず広がっている(写真13)。また日当たりのよい丘には茶畑も見えるので、地場産業のひとつとして高山茶が栽培されているのだろう。(写真14)

嘉義市内で交渉して乗った車の運転手は、六十前後であった。出水坑から太平まで、徒歩での所要時間を予測してもらったところ、(車道とは別にある)山道を使えば一時間余りで行けるのではないかと返答した。ただし(張銳漢の回想「後出」にある)三十分では無理だろう、との見立てであった。

三、「夜猿」と出水坑

張銳漢は前掲のインタビューのなかで、出水坑の景色を「山には竹林が広がっており、猿がたくさん生息している」と語っていた。

猿が群生する情景は、張文環が一九四二年に『台湾文学』第二巻第一号に発表した「夜猿」の冒頭部分の描写を彷彿とさせる。

夕陽が暮れるころ猿の群が溪下の方から木々の梢をつたひ、向ひの山にかへつてゆくので、森は風に吹かれるやうに、白い葉の裏を見せてはげしくゆれるのだつた。向ふの山の断崖には峒穴があつて、そこが猿群の巢になつてゐるのである。この集団的な生活を営んでゐる動物が巢にかへつて行く頃ほど郷愁をそぐものはない。

「夜猿」の作品舞台を探るのに、次の箇所は見落とせない。（冒頭の石とは、本篇で父親として登場する人物で、張文環の父張察をイメージさせる。）

石は漸く自分の家業を起す気になつて町から自分の部落に戻つてきたが、開墾と仕事のためにやつぱりこの山奥の一軒家に引越して来なければならなかつた。一軒家の真向ひの向ふにはカラツピンの山が見えて、阿里山鉄道の汽車の汽笛までかすかにきこえてくるのだつた。この汽笛の音だけが唯一の慰めでもありまた唯一の文化的なひびきでもあるが、しかしそれは単なる風にすぎないと気がつくともた寂しいものであつた。

阿里山鉄道は出水坑の約一キロメートル北方を走っており（写真15）、作品中で父として描かれる石は、この後六歳の長男民に向かつて「民坊、見てごらん！ 汽車の煙が見えるだらう」と語りかけている。

このような情景描写は、出水坑を想像させるものとなっている。「夜猿」の作品舞台と実際に存在する土地（出水坑）とが、いよいよ近いものに思えてくる。

張鏡漢のインタビューから、もう一箇所引用しておく。

私や文環の祖父の世代は、山林や田畑をたくさん持つていた。内訳は、田畑より山林の方が多かった。（中略）文環の父は若いころに、大坪から山へ30分ほど入った出水仔の山で山林業を営んでいた。麻竹を植えて、主に乾し筍を作つて販売し、余つた竹で竹紙を製造していた。竹紙を作るには、麻竹を石灰水の入った水槽に漬ける過程があり、伯父は人を雇つて作業に当たらせていた。やがて張和叔父も竹紙の製造業を始めたので、兄弟二人は

共同で経営することになった。

張和とは、張文環の父である張察の弟である。張文環にとつても、叔父にあたるとも、⁵「夜猿」では、「石の弟夫妻も毎日部落から通つてきて」工場の経営に携わっている。

張毓漢の回想は、「夜猿」の作品内容と多くの部分で一致している。

石の努力してゐる事業は、この孤屋の近くにある丘の断面になつてゐる石壁を物干庭に利用してもう一軒の家を建て、竹紙製造の工場にしたいことである。竹林を生かせば、石一家の生活はさして困るやうなことはない。桂竹を竹紙に製造し、麻竹を乾筍にすれば年収は少くとも三四千円⁵の純益が上る見込みである。

この一軒家へ引越してきてからまもなく石壁近くの工場も出来、若い竹を石灰で漬ける長方型の石畳の池も三つ出来、今は三つとも一杯若い竹を漬けてある。(中略)竹紙製造の方は春頃には竹を池に漬ける季節で、夏から冬近くまで、竹紙製造と乾筍の仕事でこの二つの工場は毎日三十人の人が働いてゐた。

ところで「夜猿」の時代背景は、「大正八、九年」と記されているので、一九二〇年ごろのことである。本篇が張文環の記憶に基づき、それを素材として書かれた作品だとすれば、この年の張文環は十歳すぎであつたから、記憶力も付き、子供なりに視野も広がつていたであろう。ただし十歳すぎとはいえ、当時の張文環は作品の民坊と同じく、まだ公学校に入っていないかつた。

山奥で子育てする両親は、子供を麓町の公学校に入れたいと思っていたようだ。張察をモデルにしたと思える石も、山奥の一軒家で再起を図る目的を、妻から次のようなことばで励まされて（尻をたたかれて）いる。

竹紙製造の工場が出来、乾筍工場も思うやふに行けばもう二三年で町に行ける。第一子供を学校に入れてやらなければならない

「夜猿」の民（石の長男）と哲（次男）が公学校に上がったかどうかは描かれていないが、実際の張文環は、弟の張文鉄（文瑞）とともに麓町小梅の公学校に入学を果たした。このあたりの事情も、張銳漢の回想で述べられているが、父張察の教育観と作品の石のそれとは矛盾していない。

以上より、「夜猿」の作品内容は、張文環の家族の歴史と近似していることが見て取れる。石夫妻が一軒家を構えて「山奥」の地所を開拓してゆく様子を描いた「夜猿」は、張文環の親の世代を中心に据えて、張家の家族史を描こうとしたものだと思なすことができる。そういうところからも、「夜猿」の作品舞台は出水坑と断定して、まず間違いないと思われる。

作品に描かれた出水坑の風景は、子供時代に張文環が当地で見ていた景色が写されたものであろう。そうであるならば、出水坑は張文環文学の原郷と呼んでよい。「夜猿」は張文環の作品の中でも、ずいぶん山奥深いところを舞台にし、自分の家族史を下敷きにして書かれた作品である。つまり「夜猿」は、張文環の原郷を描いた作品なのである。

四 出水坑から見る大坪と小梅

「夜猿」の冒頭部で、石の半生が紹介されている。

（石は）部落から町へころがるだけころがつてみたが、拳句の果はまたこの山奥に戻ってきたのである。（中略）石は漸く自分の家業を起す気になつて町から自分の部落に戻ってきたが、開墾と仕事のためにやつぱりこの山奥の一軒家に引越して来なければならなかつた。

以上の記述から見て取れるように、この作品は、

山奥の一軒家 \longleftrightarrow 部落 \longleftrightarrow 町

このような三重の構造を内包している。作品の結末部分で石が町で騒動を起して「派出所まで行つた」報せもこの経路でもたらされたし、夫の危急を知らされた妻が二人の子供を連れて（背負つて）町へ駆けつけるのも、この経路で動いている。

さらに工場（生産）が軌道に乗りかけると、「この製品をR町の取引先の店の日昌商店へ運ぶために、部落から日稼ぎの職人が、毎日こゝへくるのだつた。一軒家から部落、部落から町への行ききがひんばんになつてくる」というように、人も物も三か所を移動するときに、必ず「部落」を経由していることに気付かされる。

つまり「部落」は、この一帯での中継地点的な役割を持っていると見なすことができる。それは町と山の間で機能

しているだけでなく、山の村の間でも中継地点として機能しているのである。同様の構造は「地方生活」の中にも見え、これを「山奥の重層構造」として指摘した。⁽⁷⁾

「夜猿」において、「山奥の一軒家」を出水坑に、「部落」を大坪に、「町（R町）」を梅仔坑（小梅）に置き換えると、大坪の位置づけが中継地点となり、当時の実情もこれと同じであつたのだろうと思われる。

作品の時代背景となる大正八、九年よりおよそ十五年前に発行された地図『臺灣堡圖』⁽⁸⁾によると、出水坑の辺りは竹林の記号しか見えぬ（地図2）が、大坪には「警官派出所」の記号が見える（地図3）。梅仔坑になると街庄役場・郵便局出張所・祠廟などの記号が記されており（地図4）、麓の町なりのにぎやかさがうかがえる。

では、出水坑のような竹林に囲まれた山奥の寒村から、大坪という山村はどう見えるのだろうか。

「夜猿」では、「せめて部落でもいいからあそこに帰つて住みたい」と弱音を吐く石の姿が描かれている。たしかに阿里山鉄道の「汽笛の音だけが唯一の文化的なひびき」であるような山奥の一軒家からすれば、石の弟夫妻をはじめ、職人や女工たち、多くの従業員が通つてくる「部落」とは、人の多さ、村のにぎやかさにおいて差が見受けられる。

また「部落から、鼠取りよりも数十倍も大きな鉄鋏」つまり鉄製のわなが一軒家に運び込まれたり、結末部で町へ急ぐ母が子供たちのために「お菓子を買ひ」こんでいるところから、いくらかの商品が「部落」で売られていることが見て取れる。

このような描写から想像するに、大坪では出水坑のような寂しさに襲われることはなからうし、⁽⁹⁾ 商店（雑貨店）には人が集まつてきて、買い物をすることもできたであろう。さらに夜の明るさにも差があつたと思われる。「大晦日から正月十五日まで呈燈」の期間を除き、客でも来ない限りランプも灯さないから、たまの来客時に「ランプを点し

てから御飯を食べると余計にうまいやうな気がしてならない」と思ってしまう山奥の村とはちがつて、大坪は夕飯時ぐらいいはランプを灯していたと思われる。そのランプの明るさの分だけ「部落」大坪は（うすばんやりであつても）明るく見えていたことであらう。

一方町といえ、いくら麓の小さな町とはいへ、文化の香りがして輝いて見えていたのである。

「夜猿」に次のような描写がある。町から帰ってきた右の姿が、「出掛けるときよりも若く見えたのは床屋へいつてきたからであつた。山荒しのやうな父がハイカラになつたので子供達は父の体にしみついている空氣にからみついた」と表されている。父に甘えて絡みつく子供たちの姿が生き生きと描かれているところもさることながら、町の文化への憧れがよく表わされたシーンである。

山の中から、小梅を見る（想う）眼差しには、まばゆいものを見るかのような憧れがこめられていたことであらう。町の文化への憧れの延長線には、学齢期に達した少年たちの公学校への憧れも存在していた。「公学校の思ひで」のなかで、「同じ子供でありながら、町から遊びにきた親戚の子供らが、みな體にびつたりとあつた臺灣服を着、恰好のいゝ學生帽をかぶつてゐるのをみると羨やましくてならなかつた」という張文環の回想は、町の文化を慕い、公学校に憧れる心情を吐露したものである（写真16）。麓町の小梅は、それほど輝いて見えていたのであつた。

張文環の人生を前に進めたのは、町への憧れや町が擁する文化への憧憬であつた。町や文化への憧れは、奥深い山村であればあるほど強くなるであらう。町へ出たい、近代文化に触れたいという思いも、いつそう強い推進力を持つことになつたはずである。小梅に出た後も、青年になつた張文環はさらに高度な文化を持つ場所を求めて、小梅から金川（岡山）へ、金川から帝都（東京）へと、次々に文化の磁場へと吸い寄せられていったのであつた。

張文環を東京にまで駆り立てた推進力こそ、出水坑で培われていた憧憬であつたとするならば、作家張文環の誕生に出水坑は大きな役割を果たしたと言わねばならない。そうであるならば、張文環文学の原郷が描かれた「夜猿」の世界に、この作家の文学的出発点を認めてよいだろう。

上述のとおり張文環文学の代表作は小梅を舞台としたものが多く、その中には山から産物を運んでくる人たちが登場する。しかし彼らに固有名詞が与えられることはほとんどなく、買い取りの商店で値踏みされたり、山に帰る前に立ち寄る雑貨店で適当にあしらわれている姿が描かれていることが多い。

小梅に作品舞台が据えられてしまうと、作中の人たちと一緒に読者の視線も山を見上げるだけになってしまう。その結果、山中の村やそこで営まれている生活に思いが及ばなくなってしまうがちになる。空に雲がかかると瞬く間に太平山が隠れてしまうように、いつも山が心の中で像を結んでいるわけではない。もともと小梅に住む人たちはそういう日常感覚で暮らしているだろうが、張文環の文学世界には、山から麓の方を眺めている逆方向の視線が根っここのところに存在しているのである。

そもそも張文環の文学は、山中の奥深くで培われた町や文化への憧れによって、生み出されたのであつた。山の上から麓の街を見下ろしたのであろう（写真17）若き日の張文環の眼差しが、その後の張文環の文学を作り出していったのである。

麓から見上げる山の奥深くの山村は自らの出生地であつたり、家族史の出発点であつたりする場所であり、一方山奥から眺める麓の町は少年時代の憧憬の対象であり、青年期に羽ばたいてゆく踏み台となつた場所である。これら兩地をこども見交わす双方向の視線と、そこに込められた思いに支えられて、張文環文学は成立しているのである。

（二〇一三年一月）

【注】

- (1) 安倍明義『臺灣地名研究』（蕃語研究会発行 昭和十三年一月）復刻版を参照
- (2) 「張文環の生家を訪ねて」「中国文芸研究会会報」第一四四号（一九九三年十月）、「張文環の戦争協力と文学活動」「台湾の「大東亜戦争」」収（東京大学出版局 二〇〇二年十二月）等に、レポートを反映させている。
- (3) 「張文環と二つの太平山―閉ざされた作品舞台―」「東洋大学中国哲学文学科紀要」第十六号 二〇〇八年三月
- (4) 柳書琴「張文環親友故旧訪談―荊棘之道―」台湾旅日青年的文学活動與文化抗争（聯經出版事業股份有限公司 二〇〇九年五月）収。翻訳は「張文環親戚・旧友訪探録」として、『東洋大学中国哲学文学科紀要』第十九号（二〇一一年三月）に掲載。該当箇所は拙訳。
- (5) 週刊朝日編『値段史年表』（一九八八年六月）によると、大正九年の国会議員の報酬が年額三千円、同年の東京府知事の年俸が六千円であった。大正八年の白米十キログラムあたりの小売価格は、この年の前後で急騰して三円八十六銭であった。台湾における同年代の比較資料を持たないが、三千円といえは、張文環が編輯していた『台湾文学』が三井物産から提供されていた年間広告費に相当しており、この三千円で該誌の発行費が賄われていた（拙稿『台湾文学』における広告）『東洋大学中国哲学文学科紀要』第八号）。ともあれ、大金である。
- (6) 台湾総督府臨時台湾土地調査局 一九〇四（明治三十七）年調製 台湾日日新報社出版。一九六六年遠流出版公司影印
- (7) 「張文環と二つの太平山―閉ざされた作品世界―」（既出）において、「小梅（梅山）を思わせるR庄から、大坪（太平）を思わせるT部落に行き、翌朝は日の出前にT部落を発つて九時をすぎからR部落に到着している。／ここでも小さな村（T部落）の奥に、もうひとつ寒村（R部落）があるという構造が描かれて」いると指摘した。
- (8) 夜の寂しい情景がたとえば、「親子四人が寝台に入ってしまったと、この一軒家は闇の底に沈められたやうに、土をぬつてない穴だら

けの壁から星空が豪奢に輝きだして、山間の禽獣などは寢苦しさうな鳴き声を立てたり、また巢を奪はれた切ない鳥の鳴き声やむじなの毒牙にかゝつて羽叩きする音なども闇をゆすぶつてきこえてくる」というように描かれている。

【附録】

公學校の思ひで

張 文 環

わたしは山奥の部落でうまれた、めに、公學校に入つたのは十をすぎてからであつた。それまでうまれ故郷である大坪と云ふ小さな部落の書房で四書を學んでゐた。同じ子供でありながら、町から遊びにきた親戚の子供らが、みな體にぴつたりとあつた臺灣服を着、恰好のいゝ學生帽をかぶつてゐるのを見ると羨やましくてならなかつた。わたくしたち山奥の子供らは、背丈がよく●〔伸〕びるので、いつも母親からオーバのやうな大きくだぶくした着物を着せられてゐた。「子供は筍のやうにのびるからね」と云つて着物をつくるときはいつも、子供の體とはあはさないで餘分をとつて大きすぎるほどつくつてゐたのである。そのために、折角の晴着も袖を二折りも三折りもまくし上げなければならぬ。褶ひだといへび〔ど〕膝小僧をかくすくらゐの程度につくられてゐた。

したがつて子供ながらも、自分の着物はスマートでないことはよくわかつてゐた。それでも衫（上衣）から、褲（ずぼん）まで凡て新しママものを着ると、氣持がうきうきするのであつた。私の部落は床屋がないので、いつも一と月一回位は母の兩膝にはさまれて、いやが應でも小さなふぐの子の形をしたやうな剃刀で頭をくりく坊主に剃られるのであつた〔。〕その痛さは背中までびりびりひびいて、何時もはなじるをたらして泣いたものだ。さう云ふ生活からいきなり町の公學校に入る氣持は何んとも言へず晴やかであつた。床屋のある町だけでも随分たすかるとわたくしは思つた。

大正の八、九年頃といへば、今のやうに、町の進歩は早くないやうであつた。「」町の公學校と云つても、五學級だけで、六年生と五年生が一緒になつてゐるやうな學校であつた。だから毎年二三月になると、學校の先生から庄役場の役●にいたるまで總がかりで、町や部落の父兄を訪問して生徒募集をしたものだ。

交通の不便な所では、今のやうに、どこへ行つても乗合自動車があるわけではなく、夏になると、夕立がきて、川に水があふれ渡るときは危ないので、誰でも早く子供を公學校へ寄す氣にはなれなかつたのである。したがつてわたくしの公學校時分は、二年生で結婚してゐた生徒はいく人もあつた。わたくしなどは妻を持つてゐる級友を珍らしがつて、よくその新婚生活をきかうと友達をマンゴの木の下に引張つては、その結婚生活の話をせがんだものだつた。君のやうなはなれ小僧は聞いてもわからないよ。要するにむづかしいことが澤山あるのだとよく言はれた。所がそのむづかしい話がきゝたくつてしようがなかつた。二人の人間が一生において、緊密な連絡をとつて生活をしなければならぬ所に話の妙味があるのではないかと思つた。その生徒の結婚式の披露宴へ校長先生始め、ほかの先生も擔任の先生も招待されるので、先生と生徒はそれによつて友達のやうになつた。生徒が結婚生活に入るといろんな仕事があふてくるを「と」見えて、缺席の率が非常にふえたものである。そのために大きな生徒とは言へ、成績は餘りよくないやうであつた。さもないければ、わたくしが一年から六年まで一番で卒へたわけはなかつたのである。女の生徒も年ごろなものが多いので、わたくしたちはあまり口をきかないことにしてゐた。冷やかされることを恐れてゐるからである。當時のわたくしたちの間では、戀愛とか、戀愛だとか云つたやうな氣のきいた言葉はあまりつかはれてゐなかつた。色ごとめいた言葉といへばあれはあの人が好きらしいとか、あれはあの娘にいちやついてゐる。あるひはあの娘はあの人にくつついてゐると言ふふうにははれてゐた。しかし公學校を出るまで、まとまつた艶っぽい話は聞かれなかつた。入學當時は百名近くであるが、卒業の年になると三十名そこそこである。その途中、みな嫁に行つた

り婿養子に行つたり、途中で退學するものが多かつたからである。

しかし今の國民學校から見ると當時の公學校は設●が不完全なものであつた。それにも拘らず懐しく思はれてくるのは、學校が一つの樂園のやうにたのしかつたからである。學課はやさしい、今の子供達のやうな繪本やその他の讀み物がないので、仕方なしに、大人の讀んでゐる三〔山〕^{マツ}伯英臺^{マツ}とか、七俠五義、などと云つたやうなものを手あたり次第に讀んだ、〔〕マンゴの木下で獨樂がうなり、●●の遊びが生徒たちを沸きかへらしてゐた〔〕わたくしのポケットにはいつもキヤラメルや西瓜の種が一杯入れられて、それをかじりながら昔の人の戀物語を讀みふけたものでした〔〕夏の強い陽射しがネムの葉から蟬〔洩〕^{マツ}れて、焼〔蟬〕^{マツ}は●〔焼〕^{マツ}けつくやうに泣いてゐた。女の子と云はふか娘と云はふか、その娘達は廊下や木の蔭にかたまつて刺繡をしてゐるものもある。村随一のスカート常用者であり、女王のやうな女の先生はスカートを風に孕ませながら、鞭を手にとつて振り振りしながら歩いて來る。この女の先生はわたくしの母と同じ姓になつてゐるのでいつもわたくしの母を姉さんと呼んでゐた。そのためわたくしは女の先生には一目置いてゐた。わたくしはあわてゝ書物をぼけつとに押し込むと素知らぬ顔で、マンゴの木のうえの實を眺めるのだつた。マンゴの實は取つてもいい頃だつた。しかし生徒には取つてはいかぬと止められてゐるし校長先生はあまりマンゴを好まなかつた。そのために少しでも風が強くなると、ぼたぼたとマンゴが落ちてくるのである。マンゴの木蔭で晝寝をしてゐた。木からマンゴが落ちてきた。その音で目が醒めた〔〕喉をうるはせるためにはマンゴはもつて來いの果物である。即ち晝寝するのに條件がそなはつてゐる所である。さう言つたやうなんびりとした氣持で、女の先生はわたくしの所へは來ないで、女生徒のグループのなかに這入つていつた。

鐘がかんかん鳴ると、かう云つたやうな内職みたいなものを持つてゐる人達は、それぞれそれをぼけつとにしまひ込んで列を並んで一二一二●一二とまた歩調をそろへて教室に這入るのである。わたくしはまたわたくしでうつろ

な目で號令をかけてゐた。

これが當時のわたくしの公學校の情景である。そのときのわたくしの村は小梅公學校ではなく、梅仔坑公學校と言はれてゐた。梅仔坑から小梅にかはつても、校風は別に大した進歩をしてはゐなかつたが、それでもしばらく經つてから、村にバスが通ふやうになつた〔。〕バスが通るやうになると、村の變遷が目立つてきた。金持が貧乏人になつたり、貧乏人が一寸した物持になつたりするやうな變り方である。

それでわたくしは公學校を出ると、久留米ガスリの和服に羽折〔織〕^{マツ}はかまのやうな姿で、東京に行く決心をした。バスケットを右手にわたしは田舎青年丸出しで故郷を後にした。二十年近くの歳月が流れて行つた。

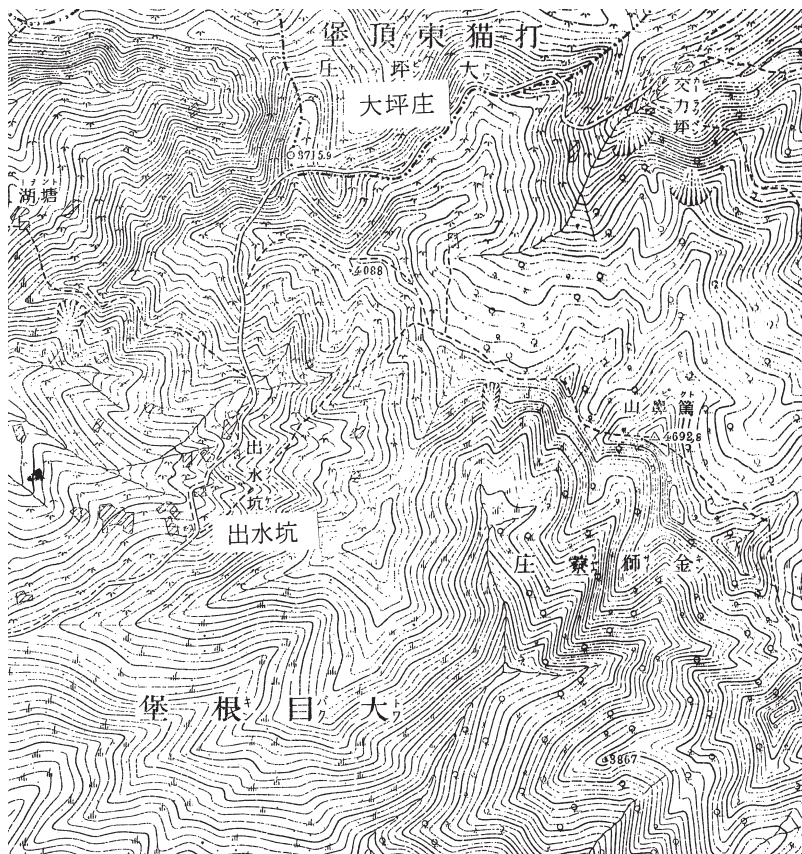
先般田舎へかへつたら、學校は十幾學級かに膨脹してゐたが、それで尚収容し切れないと云ふのである。交通が便利になり路はき〔り〕ひらかれて、山奥でもトラツクが走るやうになつた、〔。〕森がなくなつて道ばたからお化けが出るやうな話はもはや出さうになかつた、〔。〕學校の周圍は甘蔗畑であつたが、今はみな家並が建て込んで、遠くから學校のひろい庭が見られるやうになつた、〔。〕甘蔗畑や雑木林にうづもれてゐた公學校が國民學校にかはつて、全體がうかび上つてきたやうな氣がするのだつた。

『興南新聞』一九四三年四月四日

注：●は解説不能の文字。〔 〕内は野間の填字・補足

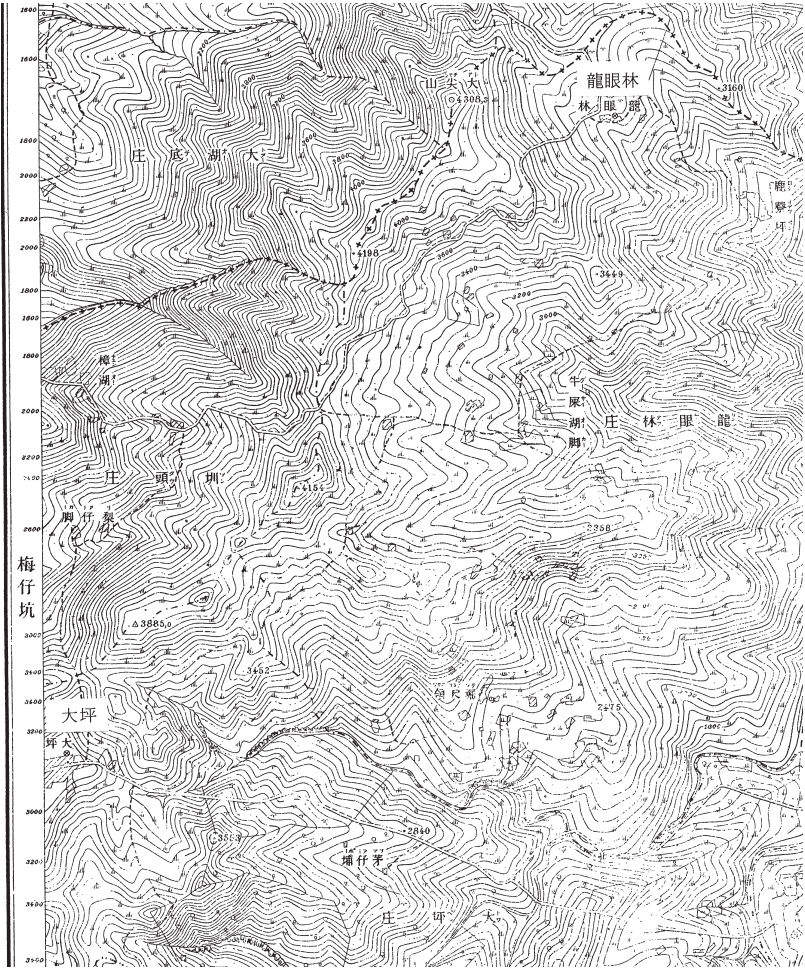


地図1:『縣市地圖 嘉義縣』(金蘋企業有限公司 2009年7月)
「梅山・竹崎・太平・龍眼・出水坑」の印字は、筆者によるもの

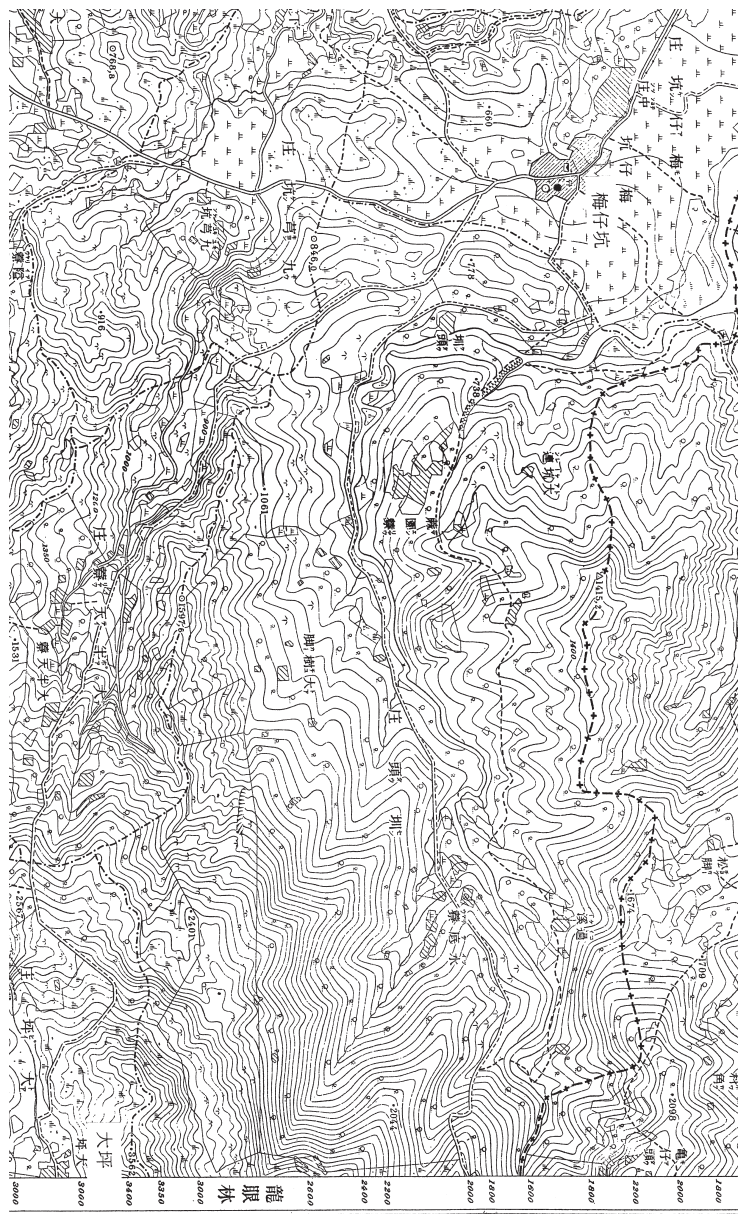


地図2：『臺灣堡圖』二五一「金獅寮」（出版年等は注6参照）

「大坪庄・出水坑」の印字は、筆者によるもの



地図3:『臺灣堡圖』二五〇「龍眼林」
「大坪・龍眼林」の印字は、筆者によるもの



地図4:『臺灣堡圖』二五五「梅仔坑」
「梅仔坑・大坪」の印字は、筆者によるもの



写真1：2010年9月。大林駅近くの製糖工場跡地に遺る軽便鉄道



写真2-1：2007年8月。梅山から東の方向に聳える太平山。空が曇ると、すぐに隠れて見えなくなってしまう



写真2-2：2009年9月。梅山から東の方向に聳える太平山の山並み



写真3-1：2009年9月。太平村の中心街



写真3-2：2011年8月。太平村の雑貨店



写真4-1：2007年8月。龍眼村の集落



写真4-2：2007年8月。龍眼国民小学の校門の向こうに山並みが見える



写真5：2009年9月。出水坑途上



写真6：2009年9月。出水坑途上



写真7-1：2009年9月。出水坑地名看板



写真7-2：2009年9月。出水坑復旧工事現場



写真8：2009年9月。太平側の行き止まり地点



写真9：2010年9月。太平側の行き止まり地点



写真10：2011年8月。出水坑復旧工事現場



写真11：2012年9月。出水坑地名看板



写真12-1：2012年9月。出水坑集落



写真12-2：2012年9月。出水坑山道



写真12-3：2012年9月。出水坑集落



写真13：2012年9月。出水坑に群生する竹



写真14－1：2012年9月。出水坑の茶畑



写真14-2：2012年9月。出水坑から太平方向の郊外に広がる茶畑



写真14-3：2012年9月。高山茶の茶摘み風景



写真15：2012年9月。出水坑に最寄りの阿里山鉄道の線路



写真16-1：2007年8月。現在の梅山国民小学の校門



写真16-2：2010年9月。梅山国民小学の校庭



写真17：太平からの下山途中に梅山の町を俯瞰する